

シネマ日記



No. 61

○月×日 「ザ・ビートルズ」が解散して40年以上が経つが、この4人グループの存在は今日でも色褪せることはない。その中でリード・ギタリストのジョージ・ハリスンといえは、最も静かで謎めいた男の印象が強い。「ジョージ・ハリスン／リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド」(マーティン・スコセッシ監督)は、その彼の58歳の生涯を音楽と映像とインタビュで綴つたドキュメンタリーである。2部構成、3時間半という長尺物の前半は、イギリスのリバプールでグループを結成した少年たちが、あつという間に熱狂的なファンに囲まれる存在となつていく、今となつては

懐かしいフィルムとインタビュで当時が語られる。ヒット曲を次々に作つていったジョン・レノンとポール・マッカートニーに対し、ジョージは阻害された存在になつていく。そんな中で麻薬に溺れ、インド音楽とりわけシタール奏者のラビ・シャンカールに惹かれていく。後半はグループの解散から2001年に病死するまでで、F1レーサーや映画製作など多彩な活動の一面を見せる。そうした中でも一貫した姿勢は、物質世界に背を向けての精神主義への憧れである。この時期、彼は多くの曲を発表していく。とりわけ「ヒア・カムズ・ザ・サン」や「マイ・スウィート・ロード」など優しく慈愛に満ちた彼の真骨頂の名曲が生まれる。ジョージと関わりがあつた数多くの音楽家たちのインタビュと共に、彼が作つた50余りの曲が奏でられる。ジョージの「優しさ」の世界にしばし浸り、満足した。

○月×日 同じくビートルズのジョン・レノン、ニューヨークの暗殺から30年余。「ジョン・レノン、ニューヨーク」(マイケル・エプスタイン監督)は、彼が生涯最も愛した街、また彼の命を奪う舞台ともなつた街、ニューヨークでの9年間の生活を描いたドキュメンタリーだ。本人のインタビュ発言や夫人オノ・ヨーコ、エルトン・ジョンなどの最新インタビュを交えて、ベトナム戦争下のアメリカで、反戦運動に向き合つていったジョンが語られる。「ニューヨークには自由がある」と言うジョンの純粹な魂を通して、自由の大切さ、自由への尊敬を考えさせてくれる。彼が凶弾に倒れた時、ヨーコが「彼はアーチストよ、なぜ殺されなければならぬ」との叫びが胸を衝かずにいられない。

○月×日 仕事一筋に生きてきた運転士(三浦友和)が定年を迎え、これからは専業主婦の妻(余妃美子)のために旅行でもと思つていた。しかし妻は看護師の仕事への復帰を決意、自分の人生を生きたいと願つたのだ。わかつてくれないのなら離婚すると。すれ違ふ夫婦。さあ、どうしたら…。「RAILWAYS」

(蔵方政俊監督) は田園風景を走る富山地方鉄道がもう一つの主役。人生という旅を乗せて走っていく。

○月×日 2011年に公開された映画の中から断と偏見で印象に残つた作品を選ぶと(☆はドキュメンタリー)、(外国)①わたしを離さないで、②英国王のスピーチ、③B I U T I F U L / ビューティフル、④トゥルー・グリット、⑤サラエボ、希望の街角、⑥未来を生きる君たちへ、⑦愛する人、⑧再会の食卓、⑨ウインタース・ボーン、⑩悲しみのミルク、⑪アジヨシ、⑫ジョージ・ハリスン／リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド☆、⑬蜂蜜、⑭バビロンの陽光、⑮ピア アフター、⑯ブラック・スワン、⑰明りを灯す人、⑱猿の惑星：創世記、⑲マネーボール、⑳やがて来たる者へ、(日本)①一枚のハガキ、②大鹿村騒動記、③ジョージとタカオ☆、④エンディングノート☆、⑤マイ・バック・ページ、⑥遙かなるふるさと旅順・大連☆、⑦奇跡、⑧はやぶさ。(内藤哲